

特集 幹細胞コスメ

アンチエイジング

ヒト幹細胞培養液10年の歴史と実績 エクソソームとビタミンC誘導体で躍進

アンチエイジングは2012年の設立以来、ヒト幹細胞培養液を専門に化粧品原料を供給し続けている日本のヒト幹細胞培養液におけるパイオニア企業であり、来年22年には設立10周年を迎える。日本市場にヒト幹細胞培養液を導入した同社の10年は、日本市場のヒト幹細胞培養液の歴史そのものとも言える。同社の代表取締役牛島美樹氏に、これまでの歴史と現在のトレンド、ヒト幹細胞培養液のこれからについて話を伺った。

アンチエイジングが設立した。

「立された2012年は、全世界の再生医療にとっても大きな転換期となる年だったといえる。05年に論文捏造が発覚するまで、韓国は世界のトップランナーであった一方、日本では12年に京都大の山中伸弥教授がノーベル賞を受賞するまで、再生医療の法的整備が全く進んでいなかった。ノーベル賞受賞を機に再生医療新法が13年に公布され、14年に施工されたことで、日本でも再生医療が大きく発展を遂げた。」

浸透性と成分保護が成功のカギ

「日本導入から数年はヒト幹細胞培養液の扱いは同社のみだったが、知名度が上がるにつれ多くの企業が参入。業界として注目を集め始めたが16、18年で、プロ用化粧品として一つのピークを迎える。しかし当時の消費者認知度は、10%に満たなかったという。ただ「その後エクソソームなど美容のプロの期待にこたえられ、ヒト幹細胞培養液の実力が消費者に認知されるのは当然で、今では最も原料を購入してくれているお客様は通販化粧品のメーカー様だ」という言葉からも、ヒト幹細胞培養液の効果実感性の高さが窺い知れる。

細胞の由来よりも培養技術が品質を高める

「現在、ヒト幹細胞培養液の原料は、様々な由来のものから供給されている。その中において、同社は脂肪由来幹細胞にこだわりを見せる。理由に、牛島氏は「脂肪由来幹細胞は採取される数が多いので、培養に無理がない。そのため美容において世界中で研究され、論文数が最も多い幹細胞だ。美容において最も結果を残し、また最も研究されている」といえる。保たれたい」と語る。

培養技術が品質を高める

「ただ同社は、細胞の由来よりも培養方法が原料の品質を左右するという考えのもと、培養技術にこだわっている。『この由来であったり、基本的な幹細胞の性質は共通だが、その幹細胞にどのような仕事をさせるかを決めるのが培養技術だ。そうした意味では当社のローリングボトル培養法は、高品質なヒト幹細胞培養液を得るのに、現在考えられる培養法の中では最適解の一つといえる。』

10周年を迎えるにあたりと今後の展望

「10年前、化粧品にヒト幹細胞培養液という素材を知り尽くした同社だからこそ提供できる原料と言えなくはない。『10年前、化粧品にヒト幹細胞培養液という素材を知り尽くした同社だからこそ提供できる原料と言えなくはない。』



牛島社長

「市場を形成していったパートナーとして、大変感謝している。」

「Re-my EV-3」はリポソームとエクソソームをハイブリッドにし、浸透や細胞への取り込みを最も高めたヒト幹細胞培養液の日本市場を形成していった企業さまの成分の保護を最重要視してきた。それが現在につながっている」と確信している(牛島氏)

「10周年を迎えるにあたりと今後の展望を指している」と語る。



Pentide-C

「この浸透型ビタミンC誘導体とヒト幹細胞培養液を組み合わせた「RS Liposome 3・O Complex」は、「Re-my EV-3」と並ぶヒト幹細胞培養液原料の最先端素材だ。「Re-my EV-3」が浸透性特化型の原料であるのに対し、「RS Liposome 3・O Complex」はビタミンCとの相乗効果を狙い、幅広く作用する原料である。ヒト幹細胞培養液

「10周年を迎えるにあたりと今後の展望を指している」と語る。